

「やる気応援奨学金」レポート

フランス・スイスで短期研修
仏語能力向上や国際機関訪問

法学部国際企業関係法学科三年 呉 民佑（千葉県立幕張総合高校）



感謝の言葉

私は、「やる気応援奨学金・海外語学研修部門」をいただき、二〇一二年の春休みに五週間フランスとスイスに行ってきました。私は

この研修で「フランス語能力の向上」、「国際機関への訪問」、「長期留学の下準備」を大きな目標としていました。そして研修を終えた今、改めて振り返ってみると、これらの目標のみならず本当に貴重な経験をさせていただいたと感じています。このような機会を御提供くださった中央大学関係者の皆様から感謝申し上げます。そして漠然と留学を計画していた時から渡航直前まで、貴重な時間を

割いてくださり、御指導くださった法学部教授の相田淑子先生に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「初めて」の海外

私は、両親の仕事の都合で中学二年次に韓国から日本にきました。それからずっと日本で暮らし、日本の中高を卒業しました。幼い頃から外国で生活しているわけですが、ずっと家族と暮らしたせいかな私にとって日本は「海外」のように感じられませんでした。そして、高校で国連の存在を知り、その中のフランス語の重要性を知った私は、いつかフランスやスイスに行ってみようという気持ちが出て

も強くありました。そして二〇一

二年二月、大学でその機会を得て、全く知らない街へ旅立ちました。

成田から出発して到着したのは、ドイツのフランクフルトでした。

到着後にすぐフランスのストラスブール行きバスに乗り、またストラスブールで終電のトラム（路面電車）に乗り、無事にホテルまでたどり着くことが出来ました。ストラスブールで約一カ月間生活をする部屋に到着して初めて「海外」という実感がわいてきました。

新しい街で暮らす

ストラスブールは、フランス北東部の、ライン川左岸に位置するアルザス地方の都市です。欧州議

会や欧州評議会などが存在し、世界の街並みが残っていてとても綺麗な街です。ストラスブールでは、主に語学学校で午前中の授業を受けていました。日本でクラス分けテストを受け、すぐ指定されたクラスに入りました。しかし、初めての授業で慌て始めました。書かれた文章ならば理解出来るはずなのに、クラスで飛び交うフランス語が全く耳に入ってこなかったのです。また、バスに乗っても、スーパーへ行っても、中心街に出ても、今まで学修してきた私のフランス語能力をはるかに超える日常でした。日本でも味わったはずの感覚なのに、全く違う感覚のように思えました。

授業では、私を含めて、ノルウェー人、トルコ人、スペイン人、ニュージールランド人などの合計六人の比較的少人数クラスでしたが、最初の違和感も徐々に薄れ、何とかフランス語で意思疎通をし

ようと、毎日孤軍奮闘する自分がいました。授業外では、定期的な会話セッションに参加したり、欧州議会見学など課外活動に参加しました。毎日新しい人に出会い、とても刺激的な日々を過ごしました。また、ストラスブールに留学中の中大生の先輩方にも会い、長期留学やフランスでの生活などたくさんのお話を聞くことが出来ました。

しかし、毎日が刺激的な生活を送りながらも、私はなぜか心の中



ストラスブールでの少人数のフランス語クラス

で後ろめたさを感じていました。

「支障なくフランス語で話したい」という気持ちが強くなり、うまくいかない時は仕方ないことだと知つていながらも、心の中でストレスを感じていたので。それから少しずつ、生活の中でフランス語から逃げることもありました。そして駅にバリ行きの切符を買いに行ったある日、私は窓口で当たり前のように「Est-ce que vous

parlez anglais? (英語を話せますか

?)」と言いました。しかし、それ

を聞いた窓口の駅員は、「Oui, mais

vous parlez français! (話せるよ。でも

君は今フランス語を話している

じゃないか!)」と言いました。それ

を聞いた私は頭を打たれたよう

な気分になりました。完璧にフランス

語を話せないのは当たり前なのに、自分のフランス語で伝える

ことが大事なのに、それを忘れて

いたのです。思わぬ場所で大変な

ことを気付かされ、私は気を取り

直してフランス語学修に励み、充実

した生活を送ることが出来ました。

生活の中でストレスを感じた

時は、よく街を散歩したり、周辺

のアルザス地方の街へ出掛けるな

よく歩いていたストラスブールの散策路



ど、生活のバランスを保ちました。

ジュネーブ、新たな出会い

私はストラスブールでの語学研修を終え、TGV (フランスの高速鉄道) に乗り国境を越え、ジュネーブへ出発しました。ジュネーブでは四日間しか滞在しませんでした。私がジュネーブへ向かったのは、「国際機関」というたった一つの理由でした。ジュネーブは国連ジュネーブ事務所を含め、世界貿易機関 (WTO)、国際労働機関 (ILO) などが位置する非常に国際的な都市です。私は、渡航

前にWTO職員のキム参事官や駐ジュネーブ大韓民国代表部へ訪問するアポイントメントを取っており、ジュネーブでは実際に国際機関を訪問し、現役職員の方々から貴重なお話を伺うことが出来ました。

WTOでお会いしたキム参事官は、WTOが発足した当時から勤務されている国際通商分野の専門家ですが、私が訪問した時は、二時間ほど時間を割いてくださり、WTO内でお食事をいただき、オフィスでも貴重なお話を伺いました。キム参事官は、韓国語で何冊か本を出版していますが、メッセージ入りの本をいただいたり、出版前の原稿をメールで送ってくれたり、とても親切で情熱あふれる方でした。漠然と将来国際機関で働きたいと思う私にとって、本当に貴重な経験であり、大きなエールをいただきました。

また、国際機関でお会いした方々だけではなく、思わぬ出会いもあり、たくさんの方に助けられました。博物館になっているルソールの生家を訪問する機会がありました。平日の昼間だったので観

光客もおらず、とても静かな雰囲気でした。そこで一人の観光客が後から入ってきたので、私は近くの博物館などを尋ねようと思い、地図を持って声を掛けたところ、彼女はパリ在住のアーティストでジュネーブで観光しているとのことでした。彼女は中国出身で中国の大学で法律を学びましたが、卒業後はパリで暮らしながら、芸術関係の仕事をしていました。滞在先のユースホステルも同じだったので、ユースホステルでも色々な話をするのが出来ました。彼女は、後に私がジュネーブからパリに到着した時も、パリの滞在先ま

で案内してくれるなど、とても親切にしてくれました。更に、私はジュネーブでの最終日の宿泊予約を間違えてしまい、危うく泊まる場所がないところでしたが、当時ジュネーブ大学に留学をされていた中央大学の大学院生の方の部屋に泊まらせていただきました。

ジュネーブでは何度も思わぬハプニングがありました。その度、たくさんの方に助けられ、無事にジュネーブでの滞在を終え、パリへ向かうことが出来ました。

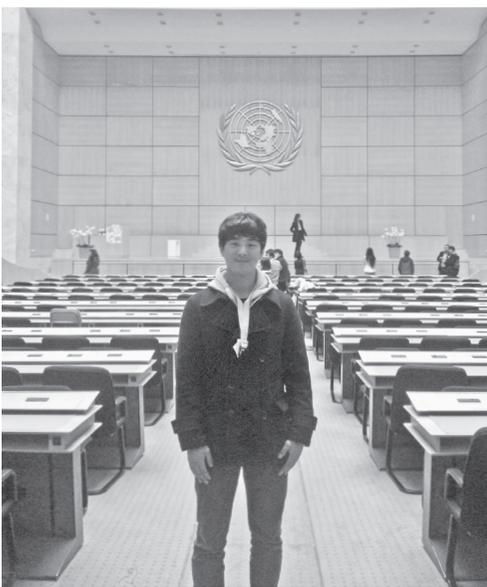
異文化を理解するということ

パリでは、約一週間フランス人の家庭に滞在させて

いただきました。実は、その家庭は中央大学で交換留学をしているフランス人友達の両親が暮らしていて、

パリ近郊のAntony (アントニー) という街に位置していました。

最後の一週間は、私にとって「異文



国連ジュネーブ事務所にて

化を理解すること」について考えさせられた時間でした。私は、友達の両親とベルサイユ宮殿に出掛けた週末以外は、基本的に一人で行動しました。世界各国からの観光客があふれる場所にも出掛けたり、現地のフランス人が多く住むエリアや他国からの移民が住むエリアも訪れました。その中で、フランスらしさや異国的な風景、またそれらが絡み合っている場面を目にし、ふと思いました。「この街はどのようになっているのかを保持しているのだろうか」と。

私がパリに滞在した一週間の間に一番印象に残ったのは、不思議なモナリザの顔でも、モンマルトルから眺めたパリの美しさでも、家庭で味わったチーズのおいしさでもありませんでした。それは、それぞれ異なる人々の価値観であり、またそれらが共存している様子でした。そして、私は人々が「異なる価値観が存在すること」を共通認識として持っているからこそ、フランスらしさと異国的な要素が共存しているのではないかと感じました。これは日本ではなかなか出来ない体験ではないかと

思いました。
帰国後、そして将来

渡航する前に考えていた目標はわずかに三つしかありませんでしたが、明らかにそれらを超える何かを得られました。それは、人々のつながりや、今までにはなかった新しい価値観など、計り知れないほど貴重なものです。私は帰国後にある漠然とした目標が出来ました。それは、「フランス・スイスへもう一度戻る」ことです。「もう一度戻る」というのは、将来の大学院進学かも知れませんが、就職になるかも知れません。どういう形であれ、もう一度訪れて当時の記憶を思い出してみたい。そのくらい、この経験は私にとっては忘れられないほど強烈なものでした。現在、短期研修を終えて約一年がたち、私は大学三年という重要な時期にいて、キャリアや将来の道を模索しています。この過程で、たくさんさんの失敗や挫折に直面することもあると思いますが、一年前の経験を思い出すと、なぜかうまく乗り越えられそうな気がします。